

The wind from the PLC

September 2018 Vol.3

風は PLCから

9

発行：鹿児島大学 教職大学院(国立大学法人 鹿児島大学 大学院教育学研究科学校教育実践高度化専攻) 1年広報係(3号担当：鶴長)



今月紹介するハイスベックマシオンは、本学三島村(三島小中学校)を結ぶ、拠点遠隔授業システムと「リフレクションルーム」を、少難しげな名称ですが、世間一般に知られてきただければ分かります。さて、これだけ聞かれます。すでに新しいかと思われ、本号でも何度か取りあげられていたのですが、設置の目的や具体的な説明は割愛し、本号では、主としてその仕組みや「何がすごいのか」という点について紹介いたします。

仕組自体はいたってシンプルです。写真①がシステム端末で、写真②の七〇インチの大モニターを使って双方向通信を行います。互いを映し出すカメラは、モニターの上部に「リフレクション」と呼ばれています。なお、写真③は、三島小中学校職員研修と本学を結んだ様子で、先方にも同様の設備があります。

特徴として挙げられるのは、端末の高処理能力です(詳細は特許の関係で不明)。出力モニターがいくらか立派(4K)でも、システムの端末性能が粗末では話になりません。また、通信回線もN-TTの海底ケーブルに専用領域を設けている(専用VPN回線)ため、一般的なインターネット通信のような遅延は皆無です。これらがあって、音声、映像とも超高品質の通信が成立するのです。

本学においては、このハイスベックマシオンを駆使し、遠隔地授業及び教員研修の可能性も追究していきます。

今月のハイスペ

拠点遠隔授業システム リフレクションルーム

テレビ会議端末・専用VPN回線等

今月紹介するハイスベックマシオンは、本学三島村(三島小中学校)を結ぶ、拠点遠隔授業システムと「リフレクションルーム」を、少難しげな名称ですが、世間一般に知られてきただければ分かります。さて、これだけ聞かれます。すでに新しいかと思われ、本号でも何度か取りあげられていたのですが、設置の目的や具体的な説明は割愛し、本号では、主としてその仕組みや「何がすごいのか」という点について紹介いたします。

仕組自体はいたってシンプルです。写真①がシステム端末で、写真②の七〇インチの大モニターを使って双方向通信を行います。互いを映し出すカメラは、モニターの上部に「リフレクション」と呼ばれています。なお、写真③は、三島小中学校職員研修と本学を結んだ様子で、先方にも同様の設備があります。

特徴として挙げられるのは、端末の高処理能力です(詳細は特許の関係で不明)。出力モニターがいくらか立派(4K)でも、システムの端末性能が粗末では話になりません。また、通信回線もN-TTの海底ケーブルに専用領域を設けている(専用VPN回線)ため、一般的なインターネット通信のような遅延は皆無です。これらがあって、音声、映像とも超高品質の通信が成立するのです。

本学においては、このハイスベックマシオンを駆使し、遠隔地授業及び教員研修の可能性も追究していきます。

それって何だろう?

PLC (Professional Learning Community)

今回は、読者のみなさんから度々お尋ねいただく、本紙のタイトルにもなっている「PLC」を取りあげます。

通常、院生が「PLC」という言葉を使うときは「PLC室」を指す場合がほとんどではないでしょうか。その「PLC室」とは、教育学部の管理棟・理系研究棟1階西端の教室で、教職大学院のほとんどの授業が行われる場所です。また、院生同士の打ち合わせや連絡調整などの各種ミーティングにも利用されます。

このように教職大学院生活の日常である「PLC室」ですが、では、いったい「PLC」とは何の略でしょう。

「PLC」とは「Professional Learning Community」を略したものです。その意味は、ざっくり言うと「目的を共有し、その実現のために協働する教師集団」といった感じになります。

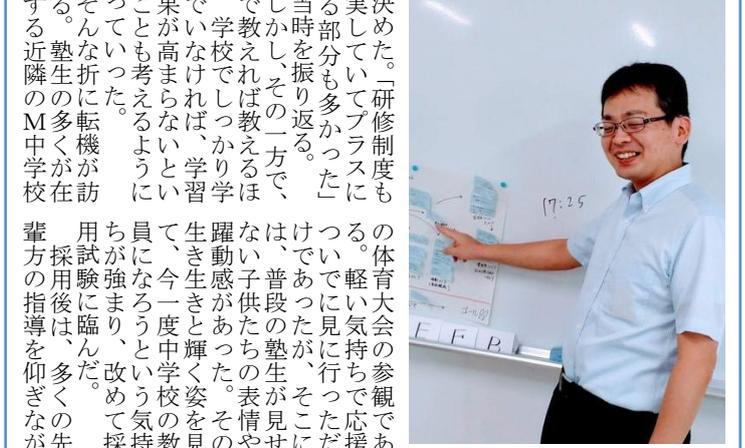
教職大学院設置の目的の一つは、県内の各学校において、その「PLC」の実現を目指す・可能にする教員を養成をすることです。教職大学院の学びの中心となる教室を「PLC室」という名称にした所以はそこにあります。【次号へ続く】

教職大学院に入学して五か月。第2タームが終わったはずなのに、分らないことや悩むことが多くなってきた。と苦笑しながらも充実した表情を見せる。専門科は社会学。中学校時代の社会学の先生が好きで、社会学教師を志すようになった。中学校卒業後、地元の普通科高校を経て、横浜国立大学教育学部中学校教員養成課程へ進学。予定どおり、社会学の教員免許状を取得したが、鹿児島県の教員採用試験には不合格となる。しかし、子供とかかわりたいという思いが強く、県内の職業学習塾への就職を決めた。「研修制度も充実しているプラスになる部分も多かった」と当時を振り返る。

しかし、その一方で、塾で教えれば教えるほど、学校でしつかり学んでいなければ、学習効果が高まらないというところも折に転機が訪れる。塾生の多くが在籍する近隣のM中学校

FACE

教職大学院1年(鹿児島市立西紫原中学校) 坂口 洋幸さん



の体育大会の参観であったが見に行っただけで、普段の塾生がいない子供たちの表情や躍動感があった。その生き生きと輝く姿を見て、今一度中学校の教員になりたいという気持ちが強まり、改めて採用試験に臨んだ。

採用後は、多くの先輩方の指導を仰ぎながら、学ばせていただく。友人たちと話すとき、現場では毎日の業務に追われ、分からないことだらけのまま進むことも多いと聞く。

私も教職大学院の実習で実際の校内研修などに参加させていたことばかりである。しかし、それは「どうしてそうなるのか」という機会でもあり、その考えを整理する時間でもあり、私にとって、

若し芽

学びを通じて

1年 中村 友哉

大学四年時、このまま教師になつて、このまじらうかと、悩み、考えた末、専門性の追求や自身の課題を明確にするべく、教職大学院への進学を選択した。学部の時代には考えたこともなかった視点で、教育そのものをとらえ、考え直すといった貴重な学びを得られて、また、その学びに代わる姿勢も、学部時代にはより能動的にな

った。悩みとしては、学ばせていただく。友人たちと話すとき、現場では毎日の業務に追われ、分からないことだらけのまま進むことも多いと聞く。

私も教職大学院の実習で実際の校内研修などに参加させていたことばかりである。しかし、それは「どうしてそうなるのか」という機会でもあり、その考えを整理する時間でもあり、私にとって、

あり、教師生活の基盤となる教育観の形成もこのように、考える時間があることは、多忙な現場からすれば、贅沢な時間なのかもしれないと最近感じている。

また、教職大学院では、本学の先生方からの指導はもちろんであるが、院生同士の交流も私にとっては、たいへん大切な学びの機会だ。本年度の一年生の内訳は、ストレートマスター(学部卒)が六名、現職から一〇名という構成である。素朴な疑問や不思議に思ったことを、現場を経験した院生に尋ねると、とても重みのある回答が得られる。逆に、そういった疑問が現職組の院生から「新鮮」と言われることも多い。このように教育に対する考えの交流ができるのも教職大学院のよさだと思っている。

本学で学ばせていただく「なぜ?どうして?」が増える。自分のことを幼児の質問期と同じだなど感じるほどである。しかし、全てのこと、今すぐできなくても、焦らずに一つずつできることを増やしていくことが最善の道だと考える。その「なぜ?どうして?」という問いを大切に考え、日々の学びを充実させ、いつか教壇に立てよう努めていきたい。